

コラム 「人間を考える」②

『もののけ姫』に〈仏教〉を読む

安藤 弥

〈浄土真宗〉の視座から、映画『もののけ姫』に〈仏教〉を読み出してみたい。『もののけ姫』は1997年公開の宮崎駿監督によるアニメ映画である。宮崎作品には必ずテーマとメッセージ性がある。『もののけ姫』は、パンフレットに歴史家網野善彦の寄稿があり、〈歴史〉的課題との関係がよく指摘される。その〈歴史〉的課題の根底にあるのは、実は、人間としてどう生きるかという問題であり、それは正しく〈宗教〉的課題である。

①生きる

物語の中盤、石火矢で撃たれ瀕死のアシタカがサンに言う（この構図も絶妙）。映画のキャッチコピーでもあるが、このメッセージのシンプルさは重要である。アシタカは「～のために生きろ」とは言わない（生命より大切な～と言うのは時に危険である）。「そなたは美しい」とだけ言う。生きることに理由は要らない。その生命（いのち）をそのままに生きること自体に意味があり「美しい」。ここに「無量寿」（はかりしれないいのち）の世界を読み取ることができる。

②オトキ

物語の後半、明け方のタタラ場で、全身に白包帯を巻く女性が懐から食べ物を取り出し、甲六の妻トキに渡す。前者はハンセン病患者＝差別された人を描いているとされ

る。歴史的には、被差別民が差し出す食べ物をそうでない人たちが受け取ることはないという。しかし、トキは受け取って食べる。彼女の名前が示唆するのは「御齋」（オトキ）である。オトキの場では、仏前において皆平等の関係で食事をする。このシーンには、差別なき世界への願いが込められている。

③ともに生きよう

物語の最後で、森に帰るサンに、アシタカが「サンは森で、私はタタラ場で暮らそう。ともに生きよう。会いに行くよ、ヤックルに乗って」と言う（「一緒に暮らそう」とは言わない）。それぞれに大切な場所があり、生きる場所がある。一つにはなれない。それでも（だからこそ）、つながりあい、お互いを尊重しあい、「ともに生きよう」といえる世界。浄土真宗ではその関係を「御同朋御同行」という。同朋大学では「同朋和敬」といい、建学の理念にうたう。ともに「南無阿弥陀仏」の世界である。

以上は、『もののけ姫』から無理やり〈仏教〉を読んでいるだけかもしれない。ただ、〈私〉と『もののけ姫』から〈人間を考える〉ことができる。あとは他の〈読み手〉それぞれの受けとめ方におまかせするしかない。

（本学 文学部仏教学科 准教授）